令和７年度

小平市立上水中学校

学校経営計画

令和７年　４月

目次

１　小平市の目指す人間像

２　学校教育目標

３　目指す学校像・生徒像・教職員像

４　令和７年度　学校経営計画の重点

５　令和７年度に取り組む11の施策と31の具体策

＜重点的な取組事項と達成基準＞

１　小平市の目指す人間像

自立：自分で考え、判断し、行動できる

貢献：地域や社会に愛着を持ち、自分にできることを考える

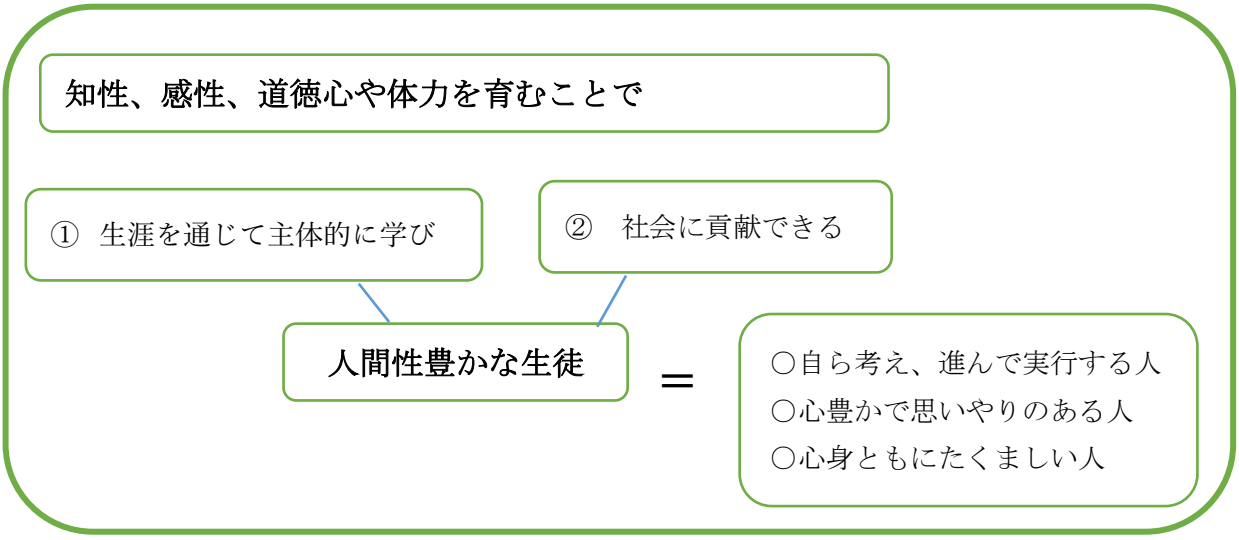
共生：他者を認め、良好な関係を築く

２　学校教育目標

知性、感性、道徳心や体力を育み、生涯を通じて主体的に学び、社会に貢献できる人間性豊かな生徒の育成を目指して、次の目標を定める。

〇自ら考え、進んで実行する人
〇心豊かで思いやりのある人
〇心身ともにたくましい人

学校の教育活動は、学校教育目標の実現を目指して行われるものですから、まずこの目標についてしっかり理解しておくことが必要です。整理してみると



教育活動にあたっては「この活動を通して知性・感性・体力は育まれているか」を考え、それによって「人間性豊かな生徒」は育っているかということが求められているということになります。

とはいえ、この目標はやや具体性に欠けるところがあります。「知性」とは？「感性」とは？　といったところの詰めが十分ではないということです。まずはこのような大枠の目標があるということ、学校で行う教育活動がここから大きく逸脱することがないように意識をしていってほしいと思います。

２　目指す学校像・生徒像・教職員像

Ⅰ　目指す学校像
- 生徒が毎日楽しく通えて、自分の力を伸ばすことのできる学校
- 教職員が働く喜びと誇りをもてる学校
- 保護者が安心・信頼をもって子どもを通わせることのできる学校
- 学校にかかわる人たちの期待に応えらえる学校

Ⅱ　目指す生徒像
- 問題解決や自己表現、他者への共感等の力をもった生徒
- よりよい人生や社会の実現に向けて、他者を理解し、協働する力をもった生徒
- 基本的な生活習慣が身に付いた、心身共に健康な生徒
- 困難や逆境に出会っても折れない心のしなやかさや回復する心の強さをもった生徒

Ⅲ　目指す教職員像
- よりよい教育活動について考え、行動できる教職員
- 生徒一人一人をいつくしみ、それぞれの良さを認め伸ばす教職員
- 教職員同士、地域・保護者とも力を合わせて教育活動に取り組み、成果を上げることができる教職員
- 成熟した社会人として生徒の範となり、教育公務員としての自覚をもった行動が常にできる教職員

毎年ホームページにもアップしている「学校評価表」の書式（市で共通のものです）では、学校教育目標に続き、この「目指す学校像」「目指す生徒像」「目指す教職員像」を掲げることになっています。

そこで学校教育目標と昨年度市川校長先生が掲げていらしたものに私自身の考えも加え、新たに上記のような目指す学校像・生徒像・教師像を掲げました。学校像については生徒、教職員、保護者の立場とそれらを包含した期待に応えられる学校を、生徒像は知徳体を基本としつつ、私自身が特に重視したいと考えるレジリエンスについて追記し、教師像については教育的愛情はもとより、信頼される社会人としての在り方の部分を追記しました。

ここに掲げた「目指す」像の実現が図られれば自ずと学校教育目標も達成されます。教育目標が理念的なものであるのに対し、それを一段階具体的にしたものだということです。

３　令和７年度　学校経営計画の重点

学校教育目標と目指す学校像・生徒像・教師像の実現をどのように進めていくか。それをさらに具体的にしたものが学校経営計画です。そして今年度の学校経営計画は、何を重視しての策定されたのか。以下に４点掲げます。

（１）ウェルビーイングの実現を目指すこと

ウェルビーイングという言葉を最近よく目にすると思います。文字通り「良い状態」のことで、個人の心も体もよい状態、さらにその人の属する社会もよい状態であるということを表します。令和５年に文科省の出した教育振興基本計画でも「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」がうたわれており、現在重視されているものです。

生徒の不登校が増えています。その多くは心身の何らかの不調が原因になっているものです。登校できている生徒間の人間関係も決して単純なものではないし、中高生の巻き込まれる犯罪もより複雑なものになってきています。コロナ禍以降、身体面の不調を訴えて欠席する生徒も増えてきているように感じています。いずれにしても、現在の中学生のウェルビーイングは進んでいるかといえばなかなか厳しいところです。

まず、生徒の心身が「良い状態」となるよう、様々な教育活動を進めていきたいと思います。それが個人にとどまらず、学級、学年、学校全体へと、さらには広く社会へも波及していくようなあり方を目指すのがウェルビーイングを求める発想だと思います。

もちろん、生徒のウェルビーイングの実現には、生徒を取り巻く環境、たとえば教職員についても「良い状態」であることが必要です。心身の不調で休職する教職員が増加してるニュースも目にしますし、学校には以前では考えられなかったような理不尽なクレームも寄せられるようになっている。教職員の心身も、生徒たちと同様危険にさらされていると考えています。

今年度の学校経営計画の重点として、学校全体でウェルビーイングの実現を目指すことを掲げたいと思います。日々の教育活動がウェルビーイングの実現につながっているかどうか、考えながら計画を立て、日々の教育活動に当たるようにしてください。

（２）「考える生徒」を育成すること

予測困難な時代と言われます。先日生成ＡＩの学校教育への活用を研究している方の講演を聞きましたが、「２年前は小学校入学時程度、現在はかなり勉強している大学生程度」の能力を持っているといいます。そのうえ、これらの技術はまさに日進月歩。ぼ月単位くらいの勢いで進んでいるそうです。

今年の１月に政府の地震調査委員会が南海トラフ地震の発生確率を上方修正したというニュースがありました。現在の中学生はその人生においてほぼ確実に甚大な地震災害と向き合わなければいけません。

このような「予測困難な時代」を生き抜くために必要な力を生徒たちに身に付けさせることは何より重要だと考えます。それは「教えてもらったことを正確に再現する」ような力でないことは確かです。状況に応じ最善の手段を考える、周囲と協働してよりよい解決策を考える、そんな力こそ必要なのであろうと考えます。

学習の場面に限らず、生徒指導に当たって、どうすれば生徒の「考える力」を伸ばせるかを意識し、教育活動を進めることは、教育という仕事に誠実に取り組もうとするなら避けて通ってはいけないことだと思います。このことを重点の３点目として掲げたいと思います。

（３）自校への「誇り」をもたせること

開校５０周年に当たる今年は、例年以上に生徒たちに「上水中学校の生徒であること」を考えさせ、意識させるまたとない機会だと思います。自分の学校を愛し、誇りをもつことは間違いなくよりよい学校づくりにつながっていきます。人間関係が希薄になりつつある中で、５０周年を迎える本校を核として、本校に通う生徒たちはもとより、教職員も、保護者や地域の方たちが、「誇りと愛情」でつながることには意義があると考えます。できうるならば５０周年を迎える今年を起点として、かかわる人々に長く「誇りと愛情」を持ってもらえるような存在でありたいです。そのためにはどうすればいいのか、ということもこの計画の重点であると考えています。

（４）読書活動の推進を重視すること

上記の３点とは違い、これは手段の話です。校長職を始めて以来、どの学校であっても必ず言い続けています。読書活動の充実の優先度はかなり高いと思ってください。他校の学校経営計画をみても読書の充実を掲げる例は少なくないですが、ただ「読書を盛んにしましょう」ではあまり意味がありません。どれくらい読んでほしいか、それによってどんな力を身につけさせたいか。そういう読書にかかわる様々なことを具体的に考え、進めていく。それによって生徒の読書活動の充実が図られれば、多くの教育課題の解決にも役立つというのが、私が信念とするところです。とはいえ本を読むという行為は本質的に人に強制されるものではありません。どうすれば生徒が本を手に取るか。本を読むか。学習に活かすか。これらについても本計画の重点としていることを意識してほしいと思います。

５　令和７年度に取り組む１１の施策と３３の具体策

１　学力の向上を目指した指導の充実

① 自ら考える生徒の育成に向けた取組

生徒が自ら課題を立てて解決を図り、主体的に学習に取り組む姿勢を身に付けられるような支援・指導に向けた授業改善を推進する。

② 協働する生徒の育成に向けた取組

各教科、領域の学習の場において、他者と協働しながら解決を図ろうとする意欲と力のある生徒の育成を図る。また、他の場面においてもそれらの協働に関わる力が活かせるよう、計画的に指導する。

③ 個別最適な学びに向けた支援の実施

生徒一人一人の学習の状況に応じた支援を進める。「スタディサプリ」の効果的な活用を通して、授業時と共に家庭学習においても各自に応じた学習が進められるよう支援する。また、教科担当の教員と放課後学習教室との連携の下、補充的な学習を中心とした支援を進める。

④ 学習意欲を向上させる指導の充実

生徒が意欲をもって学習に向かえるよう、必要な計画、環境や整備等をカリキュラムマネジメントの視点から整える。また、学習意欲の向上につながるよう家庭学習に係る支援・指導を実施する。

２　読書活動の推進・充実

① 読書習慣の定着に向けた取組の推進

読書の推進を学校の特色として掲げ、全校的な取組を年間を通じて実施する。朝読書の時間の確保を徹底、学校図書館の活用を積極的な働きかけ、図書委員会の活動支援、公立図書館との連携事業などを進め、生徒が一定数以上の読書を行えるよう支援をする。

② 学校図書館の積極的な活用

図書資料を活用した学習の場として学校図書館を積極的に活用する。各教科の授業においても、学習者用端末と併用し、図書資料を活用できるような技能の定着・向上を図り、一層の活用につなげる。また、優れた活用事例の共有を進め、学力向上に結び付く学校図書館の活用の意義や具体的な方法について共有する。

③ 読書環境の整備

生徒が使いやすい学校図書館の整備を継続的に進めるほか、学習者用端末を活用した読書記録の管理、感想の交流等を行い、生徒がいっそう読書に親しめる環境を整備する。

３　心身の安全の確保に向けた取組の推進

① 教育相談体制の充実

生徒の心身の安全を脅かすような状況を未然に防ぐと共に、安心して学校生活を送れるような体制を構築するため、スクールカウンセラーと緊密な連携を図りながら全校で教育相談に当たれるような体制を築く。

② 他者への共感力を高める指導の充実

学校生生活のあらゆる場面で、他者の気持ちを考えた言動を行うことができるよう意識をさせ、共感力を身に付けT、高めていけるような指導の充実を図る。

③ レジリエンスの育成を図る指導の充実

「レジリエンス」とは困難に出会ってもくじけず、しなやかに回復する力のことであり、同時に精神的な健康を維持する力でもある。まず生徒間に失敗を過度に責めたりしないこと、人の意見をただ否定せずいったん受け入れて考えるなどの習慣を身につけさせ、生徒のレジリエンスの育成を進める。

④ 実践的な避難訓練の計画・実施

避難訓練を形式的なものとせず、具体的な場面を想定したものとした実践的なものとするよう努め、実施あたっては生徒・職員共に高い緊張感をもって臨めるように計画・実施をする。

⑤ 情報モラル教育の実践

ほとんどの問題行動がＳＮＳの使用と関わっている現状を踏まえ、情報モラル教育を全学年対象に実施し、理解啓発に努める。また、生徒会活動と関連付け、生徒自身による「ＳＮＳルール」の策定を進め、周知と徹底を図る。

⑥ 教職員の心身の安全に向けた取組

教職員の心身の健康を重視し、働き方改革を進めるほか、必要に応じてスクールカウンセラーの支援を受けられる体制を整備する。苦情等に対する対応も個人であたることなく、管理職も含めた集団で対応するほか、必要に応じスクールロイヤー等専門家の支持も受けながら適切に対応する。

４　豊かな人間性の育成

① 人権意識の定着

「自分も大切、他の人も同じように大切」という人権意識の基本が徹底できるよう指導する。総合的な学習の時間では３年間を見通した啓発的な経験を通した学習に取り組むほか、道徳科、各教科の授業においても機会をとらえ指導していくことで、自尊感情を高めるとともに、差別意識を生まないような人権教育を実施する。

② 校内規律の確立

生徒一人一人が善悪の判断を的確に行い行動できるように、教職員全体が正確な

共通理解の下、生徒に対して是は是、否は否として毅然とした態度で接する。生徒についても、いじめや暴力、不正を許さない価値観を確立できるよう、指導を徹底する。

③ 学校行事による生徒の実践的な力の育成

学校行事、学年行事等の機会を保障し、行事により身に付けさせるべき計画性、協働意識、調整力、実践力等の育成を図る。

④ 特別活動の充実

日ごろから学級活動の中でより良い合意形成を図ることを意識させ、「根拠を明確にする」「視点を変える」「共感的に話し合う」等の技能を身に付けられるよう、指導を行う。

⑤ 部活動の充実と適正な実施

部活動の意義を踏まえ、生徒に適切な活動の機会を設定するよう努めると同時に、活動が生徒や教職員にとって過重な負担とならないよう、適正な活動を推進する。また部活動の地域移行に向け、可能な方法について地域と共に考える機会をもつ。

５　不登校への対策の実施

① 不登校の未然防止に向けた取組の徹底

不登校傾向の生徒について、ＳＣ、ＳＳＷとの連携の下、適切な指導を行う。日常的に情報収集、共有に努め、不登校に至る前の時点での適時の指導を進める。各学期のはじめの時期等に、アンケート調査や面談等を通して、生徒の状態の変化を見逃さずにとらえられるよう心がけ、不登校の未然防止に努める。

② 不登校生徒に対する継続的な支援

不登校や登校渋りの生徒に対して、当該生徒の状況を考慮しつつ、学習面の支援や学校の状況を伝える等の支援を継続的に実施し、学校復帰しやすい心理的な環境を整える。

③ さくら学級の効果的な活用

さくら学級の設置校であるメリットを活かし、転学を通して登校できそうな生徒とその保護者に積極的に情報提供を行う。また、可能な範囲でさくら学級と通常学級との交流についても検討を実施する。

６　いじめ防止への対応

①　いじめ防止に向けた指導の徹底

「いじめ防止基本方針」に沿ったいじめの防止に向けた取組を確実に実施するとともに、実態調査や個人面談を行い、早期発見、早期指導に努める。特にＳＮＳの使用について家庭との連携の下、確実な指導を実施する。道徳を中心とした指導を通

し、いじめを許さない心情の育成を図る。

７　特別支援教育の充実

① 生徒一人一人のニーズを意識した教育の実施

生徒が障害によって学習に支障をきたすことがないよう、授業におけるユニバーサルデザインを推進する。また、必要に応じて個別指導計画や学校生活支援シートの作成・活用を通常学級においても進める。

② 上水学級と通常学級・さくら学級の連携の推進

上水学級の機能と専門性を活かし、知的な遅れはなくても学習や学校生活に支障がある生徒への適切な支援を行う。また必要に応じてさくら学級との連携も進め、それぞれの知見が共有・活用できるよう連携の体制を整える。

③ 生徒情報の共有と生徒の状況に応じた指導の実施

特別な配慮や支援が必要な生徒に関わる情報について、全教職員が共通理解しつつ、それぞれの必要に応じた配慮の在り方について校内委員会で協議し、全教員が同じ理解に立って指導に当たれるようにする。

８　教育のＤＸ化の推進

① ＩＣＴを活用した学習指導への取組

学習者用端末をはじめとしたＩＣＴ機器を活用し、生徒が主体的に学習に向かう授業への改善を図る。オンライン学習教材「スタディサプリ」の活用を通して、生徒一人一人の進度に合った学習や生徒間の情報の共有や交換を進め、「個別最適な学び」の実現を目指す。市内全校配置となった「ロイロノート」についても各教員が授業での活用についての技能を獲得し、積極的に活用する。また、学習者用端末での使用が可能になった生成ＡＩ「Gemini（ジェミニ）」の活用も検討する。

② 校務の効率化・省力化に向けた活用

様々なＩＣＴ環境を活用し、校務に係る様々な見直しを行って効率化・省力化を進めて業務改善を図り、働き方改革と校務の質の向上を進める。

９　進路学習の充実

① 計画的なキャリア教育の実施

３年間を見通した計画的なキャリア教育を進め、主体的に進路選択にかかわれるようにする。また、様々な機会をとらえ、職業に関わる体験的な学習を経験させる。

② 進学に向けた指導の充実

ほとんどの生徒が高校進学を希望する現状を踏まえ、情報の整理と共通理解を行い、生徒のニーズに応じた情報提供や助言をし、一人一人の希望の実現を目指す。また、継続的に自己の理解に係る学習の機会を設け、適切な進路選択を支援する。

１０　開校５０周年に向けた取組の充実

① 自校への誇りをもたせる指導の推進

周年行事への取組を通して、自校の歴史や自校にかかわる人々に対して思いを寄せ、長い自校の歴史の中を誇りをもって受け継いでいこうとする意識を醸成し、自校に対する愛情と誇りをもたせる。

② 外部の教育力の積極的な活用

周年行事の実施に合わせ、学校運営協議会をはじめとした地域人材と緊密に連携しながらその知見や教育力を借りながら、周年行事の成功にとどまらず本校の教育活動が一層充実したものとなるよう連携に努める。

１１　信頼される学校づくりに向けた取り組みの実施

① 服務規律の確立

服務事故の発生防止に向けて毎学期の服務事故防止研修、職員会議時の服務事故防止に係る指導、ニュースレターや処分事例の確実な共有を徹底するほか、教職員間の服務事故防止に係る意識の向上、定着を図り、事故の発生しない職場づくりを進める。

② 積極的な情報発信の実施

ホームページにおける情報発信の回数を増加し、教職員がそれぞれの担当に関して定期的に情報発信できるよう取り組みを進める。校地外の掲示板を効果的に活用し、地域住民に対する学校情報の発信を通して本校への愛着を深めていただけるようにする。

＜重点的な取組事項と達成基準＞

令和７年度の重点的な取組として下の 10 点を掲げ、その達成基準を合わせて示します。この内容についてはホームページ上でも公開すると共に、学校評価の項目ともリンクをさせていきます。

重点項目	評価
１-① 自ら考える生徒の育成に向けた取組	年度末の各教科の「主体的に学習に取り組む態度」の評価について A　Ａの評価が 80%以上 B　〃　70%以上 C　〃　60%以上 D　〃　60%未満
１-① 協働する生徒の育成に向けた取り組み	教科指導において、協働的な学習の場面の設定があった教員の割合 A　100% B　90～99% C　80～89% D　80%以下
1-③ 個別最適な学びに向けた支援の実施	オンライン教材「スタディサプリ」の活用についての生徒アンケート「十分活用でき、効果があった」 A　90%以上 B　80～89% C　70～79% D　70%未満
２-① 読書の質と量の向上にかかわる取組	生徒一人当たりの年間平均読書数 A　50 冊以上 B　30～49 冊 C　10～29 冊 D　10 冊未満
４-④ 特別活動の充実	生徒アンケート「自分の学級の『話し合いのしかた』はよくなったと思う」肯定的回答 A　90%以上 B　80～89% C　70～79% D　70%未満

５-① 不登校の未然防止に向けた取り組みの徹底	年度末に不登校となっている生徒の数 A　全校生徒数×4.0%未満 B　全校生徒数×4.0～5.0% C　全校生徒数×5.0～6.0% D　全校生徒数×6.0%以上
７-② 上水学級と通常学級・さくら学級の連携の推進	さくら学級在籍生徒の聞き取り「さくら学級に転学してよかったと思う」の肯定的回答の割合 A　90%以上 B　80～89% C　70～79% D　70%未満
８-① ＩＣＴを活用した授業改善の取組	各教科等において学習者用端末等のＩＣＴ環境の活用を行った教員の割合 A　100% B　90～99% C　80～89% D　80%以下
１０-① 自校への誇りを持たせる指導の推進	生徒アンケート「上水中学校生であることに誇りをもっていますか」の肯定的回答の割合 A　90%以上 B　80～89% C　70～79% D　70%未満
１1-② 積極的な情報発信の実施	ホームページでの情報発信を増加し閲覧数を増加 A　年間 5000 件以上 B　年間 4000 件以上 C　年間 3000 件以上 D　年間 3000 件未満